

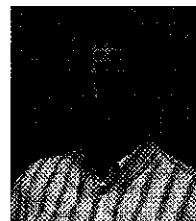
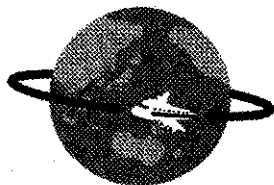
ばっけ



第78号
発行 平成28年 7月
放送大学秋田学習センター
TEL 018-831-1997

「ドバイでの恐怖体験：反面教師」

放送大学秋田学習センター客員教授 立花 希一



日本では「真似をしようまくいく」というのはかなり確かなようだが、かつてこの真似をしたことで、私は恐ろしい体験をした。1983年、3年間のテルアビブ大学留学を終えてイスラエルから日本に帰国する際、ウィーンとロンドンに立ち寄ったが、ロンドンから日本までの飛行機を近道の北回りではなく運賃の安い南回りの便にした。

私の乗った飛行機は、何かの事情で、予定のコースにはなかったドバイに一時着陸することになった。機内のアナウンスが入り、一旦空港を出て市内のホテルで昼食をとり、それからまた機内に戻ってくるという。必要な荷物だけを手にして乗客がぞろぞろと降りだした。

ラッキーなことに予定にはなかったドバイ市内も見物できるかもしれないと思いながら、ようやく私も後ろの方について歩き出した。短時間にせよドバイに入国するためには入国手続きが必要だった。入国審査の係員にパスポートを見せたところ、「あなたは空港の外には出られない」と言われ、パスポートを取り上げられたうえ、銃をもった制服の別の男によって別室に連れていかれたのである。

私には何が起こったのか皆目見当がつかなかった。室内には私と同じように連れてこられたと思われる人がすでに数人ほどいた。かれらも茫然としているようであったが、話し合っているうちになるほどと思える共通点が見つかった。全員がかつてイスラエルに入国したことがあり、その結果、イスラエル出入国のスタンプが押されているパスポートをドバイ入国審査の係員に見せたのだ。

これからどうなるのだろうか私たちは不安にかられたが、幸運なことに——その時は幸運などとは全然思わなかったが、後日、最悪の場合には刑務所行きもありえたと外交官の知人におどかさされたとき、背筋が凍りついたのを覚えている——別室に連行された以外、特に何もされず、私たちはそこで提供された昼食を食べながらしばらく待つだけだった。その後、パスポートも返してもらえたが、その時、「何の関係もないあなたたちにこのような待遇をして申し訳なかったが、今アラブの国々がイスラエルと敵対関係にあることはご存じでしょう」と言われた。

そこでようやく、イスラエルに留学する前に、イスラエルの日本大使館員がアラブ諸国に入国する際には、イスラエル入国のスタンプが押されていない別のパスポートが必要なので、二つのパスポートを所持しているという話を聞いていたのを思い出した。二つのパスポートなど所持しているはずもない私は、パスポートを見せることなど絶対にはいけなかったのだ。

機内に戻ると、ずっと機内に残っていたという一家族がいた。果たして、かれらはユダヤ人だった。一家は初めから希望して機内に残ったそうである。アナウンスの指示通りに皆の真似をして行った私たち——私だけではなかったと言っても何の言い訳にもならないが——と違い、この家族は想定外の状況を的確に判断し、機内に残るといった適切な行動をとったのである。「人真似せずに、自分の運命は自分で決める」ことに、私を含め多くの日本人はあまり慣れていないのかもしれない。